

ユマニストの誕生

—クレチアン・ド・トロワ研究の序—

目 黒 士 門

目 次

1. まえがき
2. クレチアン・ド・トロワの伝記資料
3. アノニマの時代—聖人伝と武勲詩
4. ユマニストの誕生
5. 結語

1 まえがき

上古の日本文学を代表する作品である『萬葉集』を繙くとき、おりおり「詠み人知らず」の歌に遭遇する。「詠み人知らず」とはフランス語では *anonyme* ということになるが、すこし考えてみると「詠み人知らず」には *anonyme* よりも深い意味のあることが分かる。すなわち「詠み人」の概念の存在である。「詠み人知らず」というとき、作者名が不明のばあいもあるし、あるいは作者の身分家柄が低いなどの理由から故意に作者名が隠されているばあいもある。いずれにせよ重要なことは、この古き歌集が成立したころ、すでに「詠み人」の概念が存在していたということである。つまり神楽歌や催馬楽など特定の個人に帰せられない歌謡が存在する一方で、すでに個人としての作者が明確に意識されていたのである。大友旅人の『妻の死をいたむ歌』や山上憶良の『子らを思う歌』が示しているように、個人の感情や心の動きなど人間の内面の文学的表現は、「詠み人」すなわち「個人としての作者」の自覚の上にはじめてできることであり、また逆にそうした作品は作者の生い立ちや生活歴を知ってはじめて十全な理解が得られるのである。さればこそ人間の内面を問う文学作品の研究には作家研究が必要欠くべからざるものとなる。「詠み人知らず」という一見何でもないことばの中におわれわれは日本文学における作家意識の古さを見て驚くと同時に、上古の日本文学には、すでに一種のヒューマニズムが存在していたことを改めて知るのである。

さて、中世フランス文学の研究に充てた本稿のはじめに上のようなことを書いたのは他でもない。中世フランス文学の作品の多くは *anonyme* であるが、フランス語の *anonyme* とは「名まえが分からない」あるいは、せいぜい「匿名の、名を隠した」の意に過ぎず、

「詠み人」すなわち「個人としての作者」の存在を前提とするものではない。特定の個人の作者をもたない民族叙事詩が *anonyme* だというときの *anonyme* である。したがって古きフランス文学の中に最初の「詠み人」をたずね、自我の意識に目覚めた最初の作家を探しあてることは、同時にフランス文学史上の最初のユマニストの誕生を確認する仕事でもある。この仕事は、フランス文学がユマニズムの文学であるだけに、いっそう重要かつ意味ある仕事であろう。

それでは、フランス文学における、そのような自我の意識に目覚めた最初の作家、最初のユマニストはだれなのか。それは、あらゆる証拠に照らして、おそらくクレチアン・ド・トロワ *Chrétien de Troyes* (1135? ~ 1190?) であろう。

2 クレチアン・ド・トロワの伝記資料

上に触れたように、中世フランス文学には作者名の分かっていない作品、つまりアノニムの作品が多い。また、作者名が残っていてもその生涯が霧に包まれていて、いわゆる伝記未詳のばあいが多。このような状態は総じてアノニマ (*anonymat*) と呼ばれ得るであろう。クレチアン・ド・トロワは、彼がその作品群を書くために用いた言語すなわちロマンス語 (*la langue romane*) のゆえにロマン (*le roman*) と呼ばれるジャンルの創始者と見なされている重要な作家であるが、彼とてもその生涯はほとんど知られていない。あまつさえ、クレチアン・ド・トロワという名まえは、トロワ (シャンパーニュ Champagne 州の町) のクレチアンということになり、そしてクレチアンという名は当時珍らしい名ではなかった。それゆえクレチアン・ド・トロワは、その名が残っているとはいえ、事実上アノニムに等しいとも言える。しかし、フランス文学史の黎明期のまったきアノニマ——作者名がまったく残っていない——の中から12世紀になってはじめてクレチアン・ド・トロワの名が、ロマンという新しいジャンルとともに登場してくること、しかも彼がその諸作品のプロローグにおいて確信に満ちて名のりをあげていること、さらにその新しいジャンルが、のちに小説というもっとも柔軟性に富んだジャンルに発展を遂げることを考え合わせれば、クレチアン・ド・トロワの登場は、すくなくとも文学史上は新しい時代の到来を告げるものと言わねばなるまい。

ところで、われわれはクレチアン・ド・トロワの生涯について何を知っているのだろうか。今日、クレチアンの作品を読むとき、そこに描かれているのは推定されているような聖職者 (*clerc*) あるいは旅楽師 (*ménéstrel*) としてのクレチアンの姿ではない。優雅と騎士道的理想の担い手である伝説上の人物——アーサー王とグニエヴル王妃、湖水のランスロ、円卓の騎士たちなど——が彼の作品の登場人物であり、作者クレチアンは、これ

らの登場人物の背後に姿を消してしまっている。クレチアン・ド・トロワの生涯について知られている事実は、ことごとく彼の作品のプロローグの記述に由来している。第1は、クレチアンとシャンパーニュの宮廷との関係である。『荷車の騎士ランスロ』(*Lancelot ou le Chevalier de la charette*) の献辞は、クレチアンがこの作品をマリ・ド・シャンパーニュ伯爵夫人 comtesse de Marie de Champagne のために書いたことを示している。彼女はフランス王ルイ七世 Louis VII とアリエノール・ダキテーヌ Aliénor d' Aquitaine の第二王女であるが、1164年にシャンパーニュのアンリー一世 Henri I^{er} と結婚した。クレチアンはこの献辞において彼女を「シャンパーニュの奥方」(*ma dame de Chanpaigne*) と呼んでいる。したがって『荷車の騎士』は1164年よりも後の作品である。第2は、『聖杯物語(ペルスヴァル)』 *Conte du Graal (Perceval)* のプロローグが教えるクレチアンとフランドル伯 comte de Flandre との関係である。『聖杯物語』はフランドル伯フィリップ・ダルザス Philippe d' Alsace に献じられている。フィリップは1143年に生まれ、1168年にフランドルの伯爵となり、1190年に十字軍に参加、1191年6月1日、サン＝ジャン・ダクル Saint Jean d' Acre の攻囲戦(第3回十字軍)で戦死している。したがって、この未完の作品はフィリップの死または第3回十字軍出発前に企てられたと考えられている。

クレチアン・ド・トロワに関する伝記的資料は、このようにクレチアン自身が述べているシャンパーニュ伯爵夫人およびフランドル伯との関係だけであり、その後の諸研究がもたらした“伝記”は、明確な証拠に基くものではなく、したがってほとんど論拠はない。ただ、彼の作品の検討から次の推定をつけ加えることが許されるであろう。第1に、Chrétien de Troyes というフルネームは、彼の最初のアーサー王物語『エレックとエニッド』 *Erec et Enide* のプロローグ(v. 9)において一度用いられているだけであるが、この名まえから判断すれば、彼はシャンパーニュ州トロワの産か、あるいは生涯の大部分またはあるしかるべき時期をトロワで過したのであろう。クレチアンの言語はフランシアン語(*le francien*)——またはフランシアン語にきわめて近い言語——であるが、シャンパーニュ地方語の痕跡をとどめていることから、この推定は首肯されよう。第2は、クレチアンが聖職者の教養をもっていたことである。彼が『クリジェス』 *Cligès* の冒頭に記している著作リストどおりだとすれば、作家としての彼の生涯はオウィディウス Ovidius (仏名 Ovide) の翻訳または翻案4篇から始まる。当然、彼はラテン語を知っていた。現存する作品『フィロメナ』 *Philomena* がそのことを証拠立てる。彼はまた、アルテス・リベラレス *artes liberales* (トリヴィウム *trivium* 三学科とクワドリヴィウム *quadrivium* 四学科) を修めた。『エレックとエニッド』において、戴冠の祝祭に主人公が身につける衣裳の描写(v. 6682—v. 6728)がそれを示している。彼が教会に属していたかどうかは疑わしいにしても、すくなくとも聖職者かあるいはその教養をもっていたことは確かである。

クレチアンに聖職者または聖職者の教養を認めることは、彼の作品の世俗的性格と矛盾するであろうか。そうとは考えられない。聖性と世俗性の区別は時代によって流動的であり、その区別が強調されるようになったのは、トレント公会議（1545—63）以後のことだからである。また、clerc という語は中世ヨーロッパにおいては多岐な現実を包含していたが、これについては後に詳述することとする。

クレチアンに関する他の推定はほとんど根拠がない。クレチアンは晩年フィリップ・ダルザスに従ってフランドルへ赴いたであろうか。『聖杯物語』のいくつかの詩句はそれを示唆するが、フィリップはしばしばトロワの宮廷を訪れていたから、クレチアンはトロワにいながらフィリップを知ったのかもしれない。クレチアンが軍使（*héraut d'armes*）であったという仮説（Gaston Paris）、トロワのサン＝ルー Saint-Loup 大修道院の司教座聖堂参事会員であったとする説、いずれも根拠はない。また、『クリジエス』中のイギリスに関するかなり正確な地理的記述から、クレチアンがイギリスに渡ったことがあるとする説（Gaston Paris）、あるいはクレチアンがナント Nantes に滞在したことがあるとする説（Stefan Hofer）も明確な資料に基くものではない。12世紀のトロワの町は重要な司教区であり、多くの聖職者が集り、学校が栄えていた。トロワの町は、ブリュージュ Bruges からヴェニス Venise へ、パリ Paris からゲルマニア Germanie に通ずる道路の交叉するところにあり、年6回のシャンパーニュの大市のうちの2回はトロワで開かれていたので、国の四方八方から多くの商人やジョングルール（*jongleurs* 吟遊楽人や軽業師）を集めていた。それゆえ、クレチアンはトロワにいながら広大な世界についての豊富な知識を得ることができたのである。クレチアンの作品の舞台がケルト諸国であっても、彼がケルト諸国を歴訪したと結論づける根拠はない。

今日、クレチアン・ド・トロワの研究者たちは、この詩人に関する伝記的資料の貧困を嘆く。そして「彼の生涯に関してもっと確かな知識が得られても、彼の小説創作の秘密が大いに明らかになることはおそくないだろう」（J. Frappier）と考えることによって自らを慰める。たしかに、上に見たとおり、われわれはクレチアンに関してほとんど伝記的資料をもたない。しかし、クレチアンの伝記的資料の不足を嘆くことは、作家論と作品論という文学研究の近代的二分法を、いまだ作家の個性が社会の中に埋没し個人としての作家が意識されていなかった時代の文学に押しつける危険を冒すことになるのではなからうか。作家の伝記がつねに資料として存在しているものだと考えることは、中世という時代の特質を見逃すことになるばかりでなく、文学史上におけるクレチアンの役割を見落すことになるのではなからうか。

作家の創作の秘密を明らかにするために作家の生涯を解明するという近代的な文学研究の方法は絶対ではない。これは作家がその個性を確立し、作家の人間がその作品に投影す

る時代の文学には適合するであろう。また、実際に伝記的資料が豊富にあってこそ可能であろう。学問のあらゆる領域におけると同様に、文学研究においても、研究方法は研究対象によって規定される。研究対象にふさわしい研究方法が採られねばならない。クレチアンは、いま初めて己が名をかかげて登場した作家である。それでは、クレチアンにふさわしい研究方法とは何であろうか。それは、第1に当然のことながら作品の精読であり、第2に作品を時代と社会の中に据えて考察することであろう。

3 アノニマの時代——聖人伝と武勲詩

中世は9世紀以後、封建制度の時代を迎える。社会的政治的諸制度が家臣（vassal）と宗主（suzerain）の絆に基いている封建制社会は、一種の集産制社会でもあった。集産制社会は、その秩序維持のために、すなわち封建的共同体の生存を確保するためにその成員に対してアノニマを要求する。「名を隠す」（garder l'anonymat）は総じて封建社会の重要な特質である。われわれはこの時代をアノニマの時代と規定できるだろう。芸術も文化も個人の表現ではなく、共同体の精神的高揚と結びついており、また、その担い手は無名の職人であった。ところが北フランスでは12世紀中頃に一つの変化が生ずる。第1回十字軍以来、東方の珍しい物産が輸入され始め、ますます活発となる交易はヨーロッパ世界を拡大し、相対的な繁栄の時代が到来する。この繁栄を享受したのは、とくに王侯貴族などの特権階級である。封建社会の階層化がますます進む一方で、シャンパーニュやピカルディ Picardie では生氣ある宮廷文化が開花する。この時期は、今日では「第2封建時代」（second âge féodal）と呼ばれ、文化史的にはルネッサンスとヒューマニズムの時代と見なされているが、この宮廷文化とともにクレチアン・ド・トロワが登場し、ロマン・クルトワ（roman courtois）という新しいジャンルが誕生する。このことは、時代背景（12世紀中葉）と人間の発見と新しいジャンル（ロマン・クルトワ）の誕生とが密接に関連し合っていることを示唆している。この関連の解明は、とりも直さず「ユマニストの誕生」という拙論の主題となるが、その前に、クレチアンに先立つ時代の作品、すなわち聖人伝と武勲詩がアノニムならざるを得なかった事情を振り返っておきたい。そうすることによってクレチアンの文学史上の意義がいっそう鮮明になるであろう。

11世紀までは、フランス文学は貧困であった。数篇の「聖人伝」（vies de saints）が残るのみである。すなわち『聖女ウラリの賛歌（または続唱）』*Cantilène (ou Séquence) de sainte Eulalie*（9世紀）、『聖レジェ伝』*vie de saint Léger*（10世紀）、『キリストの御受難』*Passion du Christ*（10世紀）、『聖アレクシス伝』*vie de saint Alexis*（11世紀）、『聖女フォワの歌』*chanson de sainte Foy*（11世紀）で、いずれもアノニムである。私は、上に

集産制社会のアノニマということを述べたが、聖人伝のアノニマには、その固有の理由がある。聖人伝は中世文学の一つのジャンルを作っているが、これは後の時代のナショナリズムの影響を受けた文学史家が、フランス文学の起源をより古い時代にさかのぼらせようという愛国的意図をもって、あるいは俗語——フランス語——で書かれた作品がきわめてすくない時代であるから言語研究資料としての価値が認められるという理由によって、聖人伝をフランス文学史に取り入れたもののようである。その証拠に、詩・劇・小説など、その概念がそれぞれ一応規定された近代以後の文学において、聖人伝が文学史に登場することは皆無に近い。聖人伝は、いまも昔も聖人の崇敬から出発している。教会の教えによると「聖人はその取り次ぎと模範と神との一致によって人間の聖化を助け、信者がキリスト教的徳において向上するのを助ける」(J. A. Hardon, S. J.)。そこから教会は聖人の模倣を奨める。聖人の模倣とは「聖人たちがその生涯において実行した諸徳を自分も実行しようとする習慣。教会が高徳の人物を列聖し聖人の列に加える理由の一つもこの点にある。すなわち、教会史のあらゆる時代とあらゆる社会階層の人々の聖徳の確実な模範を信者に示すことである」(同上)。聖人伝(hagiographie)および聖人伝記学(hagiologie)は、教会によって公的に根拠を与えられたものである。聖人伝の意図と重要性は、それゆえ、中世においても現代においても変わりはない。とりわけ教会がまだ反対者をもたず、神学によって理論武装する以前は、聖人伝は信者の聖化・建徳にきわめて重要な働きをしていた。聖人伝には、『聖女ウラリの賛歌』のように賛美歌や続唱の形式をとるものもあり、とくに続唱は一定の祝日にミサ中の福音書朗読前にさまざまな韻律で歌われた。このような事情を反映して、中世の聖人伝はもっぱら教会または修道院が作ったものである。『聖女ウラリの賛歌』はヴァランスイエヌ Valenciennes の近くのサン＝タマン Saint-Amand の修道院の司祭であるらしいが、その名は知られていない。『聖レジェ伝』はウルシヌス Ursinus のラテン語散文の聖人伝によって作られたものらしいが、これも教会の典礼で詠唱されたものであり、アノニムである。『聖アレクシス伝』は作者がルーアン Rouen の修道司祭チボー・ド・ヴェルノン Thibaut de Vernon に擬せられているが、確証はまったくない。つまり集産制の修道院が作り出すものは、その作者が高位聖職者のばあいを除いて——あるいはそのばあいでも——アノニムであることは、ごくふつうのことである。要するに中世文学初期の一連の聖人伝は、その性質と成立事情から見て、教会という信仰共同体に属するものであり、個人としての作者が前提されてはいないし、また前提さるべきものでもない。

聖人伝に続くジャンルは「武勲詩」(chansons de geste)である。11世紀以降、3世紀にわたって武勲詩が盛んに作られる。聖人伝を別とすれば、フランス文学は古代ギリシャ・ラテンの文学と同様に叙事詩に始ると言える。今日に伝わる最古の武勲詩は11世紀末

または12世紀初めにさかのぼる。すなわち『ロランの歌』 *Chanson de Roland*, 『ギヨームの歌』 *Chanson de Guillaume*, 『ゴルモンとイザンバール』 *Gormont et Isembard*, 『シャルルマーニュの巡礼』 *Pèlerinage de Charlemagne* がその代表作である。

武勲詩は8世紀または9世紀のフランスの国民的草創期（シャルルマーニュからルイ3世 Louis III）の人物と事件を再生しているが、そこを貫く理想は異教徒討伐の十字軍思想と封建的主従関係における忠誠信義である。その結果、カロリング朝時代の英雄は12世紀の騎士と十字軍士の姿に改変されている。のちに「王のジェスト」（*Geste du Roi*）の詩群を生み出す『ロランの歌』は、史実としては、西暦778年8月シャルル大帝がスペイン遠征の帰路ピレネー山中でバスク土民の襲撃に遭い、ロランの後衛軍が全滅したというだけのことに過ぎないが、『歌』はこのピレネー山中の小事件から、宗教的愛国的信仰と異教徒討伐の聖戦を謳う一大叙事詩を構築する。『ギヨームの歌』は、のちに「ガラン・ド・モングラヌのジェスト」（*Geste de Garin de Monglane*）の詩群を生み出すが、これは異教徒に対するオランジュ公ギヨーム Guillaume d'Orange の戦いを物語る。ギヨームの甥ヴィヴィアン Vivien はアルシャン Archamp（またはアリスカン Aliscans）に上陸したサラセンの王テラメ Déramé と戦いを交えるが重傷を負って敗退。救援にかけつけたギヨームも敗戦を重ねるが、最後にフランス国王ルイの援助を得て勝利を得る。『歌』は異教徒討伐の聖戦と封建家門の擁護を歌ったものである。『ゴルモンとイザンバール』は第3の詩群「ドーン・ド・マイヤンスのジェスト」*Geste de Doon de Mayence* の祖であるが、この作品は9世紀のノルマン人侵攻の史実を改変したものである。史実は、881年にノルマン人がフランスに侵攻し、サンテュール Centule のサン＝リキエ Saint-Riquier 教会を破壊した事件である。ノルマン人は同年8月3日ルイ3世の手でソークール Saucourt で撃破される。『ゴルモンとイザンバール』は、ルイ王の宮廷に仕えるイザンバールという騎士を創作する。イザンバールは国王から受けた侮辱を復讐するためにキリスト教を捨てて異教徒の王ゴルモンに仕え、フランス侵攻の手引きをし、サン＝リキエ教会を炎上させる。しかし、ルイ軍の反撃を受けてゴルモンは戦死し、イザンバールも重傷を負って敗走。死の直前に改心し、聖母に手を差しのべながら死んでいく。『ゴルモンとイザンバール』は『ロランの歌』や『ギヨームの歌』とは趣を異にし、背教者・逆賊と君主の抗争をテーマとしているが、注意すべきは、逆賊がその末期には、罪を悔い改めてキリスト教徒として死んでいくことである。異教に対するキリスト教の勝利を謳う点では、上の二つの『歌』と異ならない。『シャルルマーニュの巡礼』は、その叙事詩的登場人物のゆえに武勲詩のジャンルに加えられているが、東方的驚異に対する素朴な好奇心とゴーロワ的な悪戯児たちの愉快な大言壮語などその喜劇的要素からすれば、一種の町人文学である。

要するに、武勲詩——12世紀末から13世紀にかけての改変潤色を経た武勲詩ではなく、

古い武勲詩——は、異教徒討伐の十字軍思想、封建的主従関係における誠実、あるいは封建家門の擁護を謳い上げたものであり、11世紀の歴史的諸事件と宗教的愛国的信仰の反映である。それは封建的共同体の文学であり、泣き、笑い、喜び、悲しみ、愛し、妬む人間が姿を現わす文学にはまだ遠いのである。

4 ユマニストの誕生

聖人伝と武勲詩からクレチアン・ド・トロワのロマン・クルトワ roman courtois へと時代を追って読み進むとき、われわれはクレチアンの新しさにすくなくならず驚かされる。その新しさの印象はどこから来るのであろうか。第1に、フランス文学にはじめて女性が登場し、恋愛がテーマとなる。それは愛と冒険の相剋という男性の魂を永遠に引き裂くテーマである。叙事文芸の英雄たちの武勲が集団的努力であったに対し、クレチアン文学の騎士の行動は個人的冒険である。騎士を動かすのは、いまや愛する女性である。騎士が合戦と冒険において名誉を重んじ名声を博そうとするのは、愛する女性に自分がふさわしいことを示すためであり、彼女の愛に値するためである。女性の登場とともに繊細な恋愛心理の世界が開拓されるが、そこには作者の心理的眞実に対する好みがかがわれる。第2に、物語の筋は、その創意工夫によって、あるいはその交錯によって絶えず読者の興味を新たにす。見知らぬ騎士、突然の挑戦、決闘、場面の急変、さまざまな困難辛苦と積み重なる障害、不意打、魔法などが巧みに用いられている。第3に、同時代の実生活の興味あふれる描写である。夢幻的なブルターニュの題材を利用しつつも、クレチアンは当代の生きた人間の生活に絶えざる関心を抱いている。彼は恋愛心理のメカニズムを解剖するだけでなく、生活の外部をも観察し記述することを知っていた。城、御前会議、儀式、騎馬槍試合、さまざまな慣習、武具、家具、馬具、衣裳、料理、食事、さらには当時の下級武士の苦しい生活や賤民の窮状に対しても濃やかな観察の眼を向けていた。第4に、軽妙で優美なクレチアンの文体である。「フランス語をりっぱに話すたくさんの礼儀正しい美しい貴婦人たち」(『荷車の騎士』v. 39—40)という記述が示唆するように、彼は言語への深い関心をもっている。文体は練り上げられている。対話は調和がとれており、作詩法は完璧である。また表現は簡潔で明快である。畢竟するに、あり得べきクレチアン像は古典古代に対する深い造詣に支えられ自我に目覚めたユマニストの姿であるが、ユマニストの誕生を語るためには、時代と作品を通じてさらにクレチアンの人物を明確にしなければならない。

何よりもクレチアンを支えていた教養は、聖職者としての教育を通じて培われた古典古代への造詣である。彼が聖職者であったか、または聖職者的教養をもっていたと考えるこ

とは、武勲と冒険と恋愛を称揚する騎士道物語の作者であることと矛盾するように思われるかもしれない。この意見は、とくにキリスト教と教会の中にアンチフェミニズムを認める立場から主張された。しかし聖性と世俗性の区別が中世においてはのちの時代よりもっと流動的であったことはすでに述べた。ここでは、中世ヨーロッパにおいて *clerc* という語が表わしていた多岐な現実について述べる。中世においては教育と文化の担い手はもっぱら教会であったが、教育はすべて *clerc* ——正確には *prêtre* (司祭)——の養成を目的としていた。ところが実際には *séculier* (教区所属の司祭) と *régulier* (修道会所属の司祭) のほかに、*prêtre* ではない *clerc* がいた。というのは、今日では *clerc* とは助祭 (*diaconat*)・司祭・司教 (*évêque*) の三つを指すが、中世にはトンスラ (*tonsure* 剃髪) を受けただけで聖職者の身分を得て、教会での儀式において *clerc* としての特権が認められていたからである。当時、教育を受けようとするものは、彼らの修学のはじめには司祭になることが予定されていた。彼らはこうして聖職者への道、すなわち教養への道に入ったのであるが、下級聖品のみで *clerc* となっていたのである。また、聖職者にはその道から脱落するものもあり、いわゆる「さまよえる聖職者」 (*clercs errants*) もあった。しかし、「さまよえる聖職者」以外の脱落者たちは節度と礼儀を遵守していた。彼らは、*clercs* としての学識と人格によって王や領主の宮廷に迎えられたのである。あらゆる蓋然性によれば、これが12世紀後半における騎士道物語作者の姿であり、彼らは教会人であるよりは文人であった。クレチアンもこうした *clercs* の一人であると考えられている。彼がラテン語を知っていたこと、アルテス・リベラレスを修めたことにはすでに触れた。彼はまた神学の概念と聖書の知識をもっていた。聖書の反映はとくに『聖杯物語』のプロローグで明らかになる。そこでは、クレチアンは「神は愛である。聖書によれば、聖ポーロがそう言い、私はそれを読んだことがあるが、愛に生きるものは神にとどまり、神は彼にとどまる」(v. 47—50) と聖ヨハネの一節——クレチアンは誤って聖ポーロのことばとしている——を引用している。

クレチアンが聖職者であること、あるいは聖職者的教養をもっているということは、彼がユマニストであることと両立しないであろうか。キリスト教とユマニズムを相対立させる考え方は現代ではすでに斥けられている。キリスト教による人間の教化がルネッサンスの原動力となり、引いては、あらゆる文明の末子であるヨーロッパ文明をもっとも開化した文明たらしめたように、クレチアンの受けた聖職者的教養は、彼をもっとも大胆なユマニストたらしめたのではあるまいか。

クレチアンの作品のいくつかのプロローグは、彼のユマニスト的的局面を雄弁に物語っている。彼の最初のアーサー王物語『エレックとエニッド』のプロローグにまず耳を傾けよう。

「平民が諺に言うことには、人が軽蔑しているものは考えられているよりは遙かに価値があるものだ、と。それゆえ、己れがどんな知識をもっているにせよ、己れの知識を善用する人はりっぱなことをしているのである。なぜなら己れの知識を疎かにする人は、後になって大いに人を楽しませるでもあろう事柄を黙過するかもしれないからである。さればクレチアン・ド・トロワは申し上げるが、己がじし何はともあれ、りっぱに語り正しく教えることに思いをいたし、さように努むべきことは理の当然である。かくて私はある冒険譚から、筋の整ったこの上なく美しい物語を作り出そう。それによって神がお許しになるかぎり、己れの学識を広めることをしない人はまったく賢明でないことを示し、また確信することができよう。これはラック王の子エレックの物語である。生計を立てるために語り物を語ろうとする輩は、王や伯爵の前でこの物語を細断し、台なしにしてしまうのが常である。私は、ただいまからこの物語を始めよう。この物語はキリスト教国が続くかぎり、つねに人々の記憶にとどまるであろう。これはクレチアンが誇りとしたことである」(v. 1-26)。

このプロローグにおいて、クレチアンはまず知識の効用を説いている。知識の自由な活用を奨励する人文主義的態度をはっきりと表明している。そして、自分の名をフルネームで名乗った後、「私はある冒険譚から、筋の整ったこの上なく美しい物語を作り出そう」と、作家としての意欲と決意を示す。次いで、職業的な語り手——それがジョングルールを指すかどうかはさて措くとして——を厳しく指弾する。これは芸術の高みに立っているもの、あるいは立とうとしているものの指弾であり、すくなくとも、生活の糧を得るために語り物を語る輩とは一線を画そうとしている。最後に「この物語はキリスト教国が続くかぎり、つねに人々の記憶にとどまるであろう」と述べて、自分の作品の価値に対する信頼を示す。プロローグの締めくくりに「これはクレチアンが誇りとしたことである」とつけ加えるとき、彼は何を誇りとしたのであろうか。諸説が行なわれてきたが、この作品が末長く名声を保ち、人々の記憶にとどまることを彼は誇りとしたのであろう。そう解するのが自然である。

あらゆる分野の文物を古代ギリシャ・ローマの古典に基かせることは人文主義の基本的態度であるが、この態度は『クリジェス』のプロローグにも現われている。

「私があなたがたにお話し申し上げたいと思うこの物語はボーヴェー Beauvais のサン＝ピエール司教の文書館の書物の一つに書かれている。物語がそこから引出されたのであるから、それはこの物語が真実であることを証している。それだけにこの物語はいっそう信用に値する。われわれは、われわれが持っている書物によって古の人々と古の時代の事蹟を知っている。われわれの書物は、騎士道と学問の最初の名声がギリシャにあったことをわれわれに教えた。次いで騎士道はローマに伝来した。学問のすべでもともに伝来した。そしてそれらは、いまフランスに到来した。願わくはそれらがこの地にとどまらんことを。また、この地がそれらの気に入るところとなり、この地に足を止めた栄光がフランスから去ることのなからんことを。神はそれらを他国民に貸し給うたのであった。なぜなら、もはやギリシャ人もローマ人も人の話題となることはまったくない。彼らのことが話されるのは終わった。彼らの火は消えてしまっている」(v. 18-42)。

このようにクレチアンが学問 (clergie) と騎士道 (chevalerie) の結合を称え、それらのギリシャからローマへ、ローマからフランスへの栄光ある伝来を称えるとき、その意味は大きい。彼は自分が古代の遺産の後継者であると感じ、また、そうありたいと願っていたのである。さればこそ彼は、フランスの地に足を止めた栄光がいつまでもフランスにとどまることを切望し、ギリシャ人やローマ人がすでに話題にならなくなったと断言するのである。同じ『クリジェス』の冒頭で、彼は、それ以前に書いた作品として「オウィディアナ Ovidiana」(オウィディウス翻案群) 3篇を含む6篇の作品を列挙しているが、それはクレチアンがそれまでに手がけた作品への信頼とともに、自分が古典詩人の後継者であるという自負を示したものと見えよう。彼は自分が神から授かった知恵を隠すことはせず、逆にあらゆる謙譲を捨てて古代の伝統を求めた。同じような確信は『荷車の騎士』の中にも見られる。

「奥方におもねんとする輩ならば、これぞ機会とばかりにおべっかを使い、奥方さまが生きとし生けるすべての貴婦人に優ること、あたかも四月と五月に吹く西風が他の風に優るがごとし、と申し立つこと請け合いです。まことに私は、いささかもわが奥方に媚びようとするものではない」(v. 7-15)。

「私がこの仕事に捧げる知恵と労苦以上に奥方の命令がこの作品においてりっぱな働きをすると申し上げよう」(v. 21-23)。

ともあれ当時の宮廷聖職者たちは、古代人の模倣——翻訳または翻案——から出発し、それによって作品の修業をした。クレチアンもその一人であるが、ラテン語を知っている彼がオウィディウスを母国語たるフランス語で模倣したことは、のちのフランス文学の形成に多大の貢献をもたらした。なぜなら模倣は母国語で行なわれたときに、はじめてその創造性を十分に発揮できるからである。古代模倣のもっとも直接的な成果は、古代物語 (roman antique) である。その代表作はスタティウス Statius から取材した『テーベ物語』*Roman de Thèbes* (1150頃)、ヴェルギリウス Vergilius から取材した『エネアス物語』*Roman d'Enéas* (1160頃)、フリジア人ダレス Darès le Phrygien とクレタのディクテュス Dictys de Crète を模倣した『トロイ物語』*Roman de Troie* (1165頃) であり、これらの模倣はテーマもさることながら、むしろ詩法、物語と対話の運び、描写の手法、イマージュと比喩の使い方、文体の技巧などであった。古代模倣による文学修業は、やがて15年たらずのうちにロマン・クルトワの花を開かせることになる。古代詩人の中でもっとも近代的と見なされていたオウィディウスは、また、情熱の比類なき画家であった。その影響はクレチアンの初期の「オウィディアナ」はもちろんのこと、『クリジェス』およびその後の作品の中にも認められる。すなわちクレチアンは、機智に富んだ表現、優美な叙

述、詩句の造形的な美をオウィディウスから継承したように思われる。しかし、オウィディウスの最大の影響はクレチアンを恋愛文学に招いたことであろう。

クレチアンの恋愛文学は、ひとり古代の影響あるいはオウィディウスの影響のもとに生まれたのではない。南仏トゥルゥバドゥール troubadours の抒情詩は、彼に宮廷恋愛の諸概念と入念に形作られた詩型を提供する。また、当時のあらゆる文学に投影していたトリスタン Tristan 伝説とブルターニュの諸題材の影響がつけ加わる。程度の差こそあれ、『荷車の騎士』も『ライオンの騎士』もトリスタン伝説から着想を得ている。『エレックとエニッド』も『クリジェス』も、トリスタンとイズ Iseut を別の一組の恋人に置き換えることによって、トリスタン伝説に対する対立または超越を意図したという意味で、トリスタン伝説の影響にさらされている。

ともあれクレチアン文学は、さまざまな点で新しい時代の到来と人間性の解放を告げる文学である。その誕生のときからロマン・クルトワであった物語は、その柔軟性により、すなわち想像力・心・知性のあらゆる要求に応ずることができるがゆえに、主観的・静的なシャンソン chanson よりも心理描写と性格描写に適していた。いかなる影響下にあったとはいえ、クレチアンは彼自身の個人的省察と創意によって物語の特長を十分に利用しつつ、人間の内と外とを冷静に、ときには意地悪な観客として描いていた。彼は、それまで社会的価値を与えられていなかった恋愛とか夫婦愛のような個人的行為を描くことによって文学による環境変化を創始していた。彼のアーサー王物語においては、騎士の武勲は個人的冒険となる。さらに世俗的ではあるが、人間の肉体美の発見がある。

当時、おそらく多くの貴婦人たちは、満たされない心と空想を抱きつつ暗い城の中で思い悩んでいた。他方、多くの騎士たちは封土もなく、名誉の名のもとに主君につき従い、騎馬槍試合のつましい栄光に甘んじていた。織物産業に従事する女工たちは、信じられないような低賃金を強いられ、彼女たちの犠牲の上に工場主の豊かな生活が保証されていた。こうした中世人の生活を冷徹な目で観察し、そして活写したクレチアンの中には、やはりユマニストの誕生が認められるのではあるまいか。

5 結 語

ユマニズムとかユマニストということばには、どんな定義も定義不十分と思われるような広い意味がある。また、人によって時代によって、このことばに与える意味も違っている。しかし、その多義性の根底において共通するものは、ありのままの人間肯定であり、人間を真に人間的たらしめている特質の宣揚であり、一言で言えば人間の尊重である。拙論はこのような観点から、クレチアンの時代と作品を通じてクレチアンの中に認められる

人間尊重の態度を概観したつもりである。

ルネッサンスによって否認された中世は、17世紀には「野蛮な時代」として扱われた。18世紀は「啓蒙」と「良き趣味」の名において中世を拒否し、中世の中に「盲目的信仰」と「野卑」しか見なかった。このような後代の中世観は、ユマニズムをもっぱらキリスト教的中世のアンチテーゼと規定することによって、中世の中に人間尊重の態度を見ることを拒否してきた。ユマニズムは人間性の完全な発達を強調した古典古代の——キリスト教以前の——作家を称揚する。しかし、古典古代を称揚することはキリスト教の否定にも中世文化の否定にもつながるものではない。事実、キリスト教の信仰をもちながら古典古代の学芸を自由に活用したユマニストもいた。ダンテ Dante であり、トーマス・モア Thomas More である。

中世という長く複雑な時代を、ひとまとめに否定したり称揚したりすることは誤りである。ユマニズムをキリスト教的中世のアンチテーゼと考え、中世におけるユマニストの存在を否定することは、中世の現実に目を閉ざすことになる。確かな事實は、クレチアン・ド・トロワの作家としての生涯がオウィディウスに始まり、聖なる古代（『ペルスヴァル』）に終わることである。ダンテに先立つこと100年である。また、クレチアン・ド・トロワが古代詩人をフランス語で模倣し、いち早くフランス語の擁護と顕揚を成就したことである。プレイヤッド Pléiade に先立つこと400年である。（完）

〔付記〕 この論文は昭和57年度に東北大学文学部および同大学院、ならびに筑波大学第一学群人文学類および同大学院で行なった講義の草稿に加筆修正を施し、論文にまとめたものである。したがって必然的に概説的である。また「クレチアン・ド・トロワ研究の序」という副題が示すように、今後に発表予定の各論の序をなすものである。

論文執筆に使用した作品のテキストおよび参考文献の bibliographie は、各論においてその都度必要に応じて掲げることとし、本稿では割愛する。しかし次のことは記しておかねばならない。

1) テキストはすべて *LES CLASSIQUES FRANÇAIS DU MOYEN AGE*, Collection fondée par MARIO ROQUES, publiée sous la direction de FELIX LECOY, LIBRAIRIE HONORE CHAMPION を使用した。したがって拙論中の引用の行数表示は、この双書の各作品の行を示している。

2) 本稿執筆のためには、とくに下記の書物を参照し、それに多くを負っていることをお断りしておく。

J. FRAPPIER, *Chrétien de Troyes*, Coll. "Connaissance des Lettres", Paris, 1968.

G. COHEN, *Un grand romancier d'amour et d'aventure au XII^e siècle, Chrétien de Troyes et son œuvre*, Paris, 1931.

G. PARIS, *La littérature française au Moyen Age*, Paris, 1905.

S. HOFER, *Chrétien de Troyes, Leben und Werke der altfranzösischen Epikers*, Graz-Köln, 1954.

J. A. HARDON, S. J., *Modern Catholic Dictionary*, New York, 1980.